

田中さんの話と食品安全委員会と、どんな関係があるの？

残留農薬をテーマ
県職員

内閣府

「食品安全委員会」って 何するところ？

内閣府 食品安全委員会 事務局

皆さん、こんにちは。食品安全委員会事務局の岡田と申します。

きょうは田中さんのお話がメインなのですが、その前に少し時間をいただきまして、食品安全委員会について少しお話をさせていただきたいと思います。

皆さんにお配りした今日のプログラムの一番下を見ていただきますと、「徳島県と食品安全委員会 の共催」と書いてありますね。

「農産物に残留している農薬をテーマとした県職員の田中さんの話」と「食品安全委員会」と、いったいどんな関係があるのでしょうか。

それは、食品安全委員会がどんな仕事をしているかを知っていただければ、納得していただけると思います。



皆さん方に、安全でおいしい料理を毎日楽しんでいただくために、日本では「リスク分析」という名前の、食品の安全を守る仕組みを採用しています。

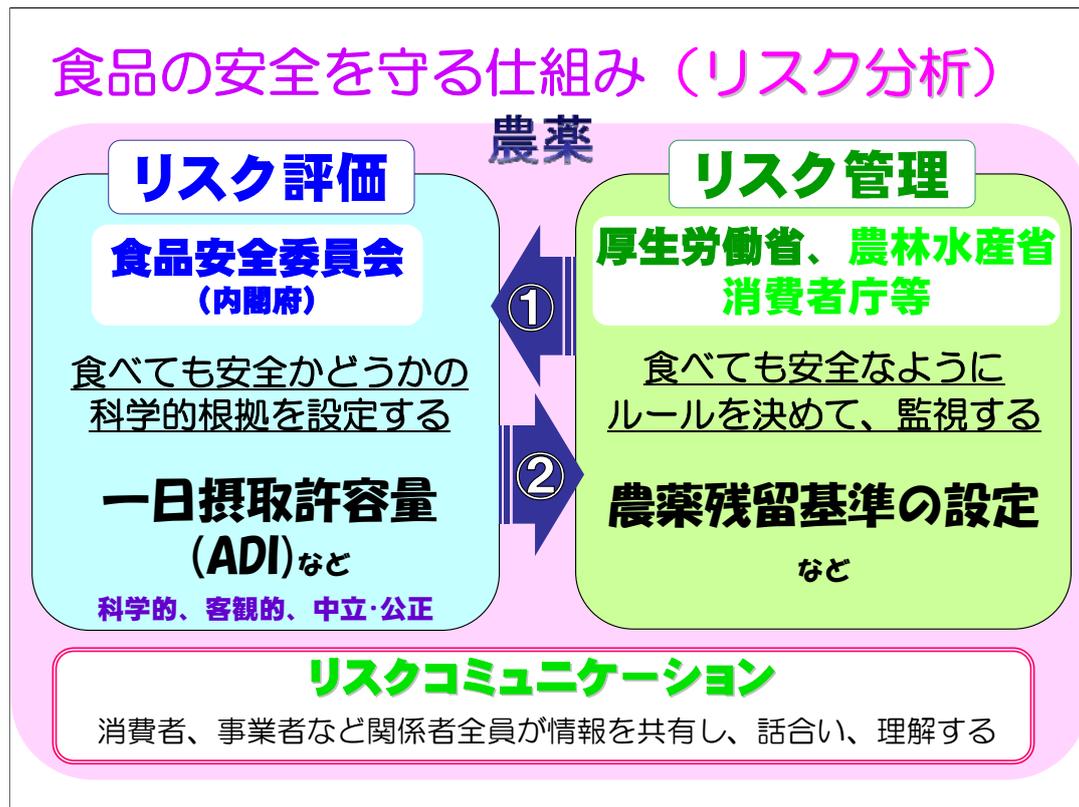
リスク分析の取り組みは、自治体と国の機関がそれぞれ役割を分担しながらも連携して実施しています。

リスク管理という役割を担っているのが、自治体、それから、厚生労働省、農林水産省、消費者庁などの国の機関です。

リスク評価という役割は、内閣府の食品安全委員会が担っています。

そして、いずれの機関においても、リスクコミュニケーションという取り組みが行われています。

それでは、リスク管理、リスク評価、リスクコミュニケーション とはいったい何でしょうか。次のスライドで説明したいと思います。



たとえば、きょうの田中さんのお話に出てくる農薬の残留基準は、私たちが安全な食生活を送るために、とても重要なものです。

農薬のリスクをきちんと管理するために、厚生労働省が農薬の残留基準を設定します。しかし、いきなり基準を決めたりはしません。

まず、食品安全委員会に対して、その農薬のリスクの大きさを評価して下さいと依頼します。

依頼を受けた食品安全委員会は、科学データをもとに、農薬のリスクを純粹に科学的に評価し、「一日摂取許容量」という、“食べても安全かどうかの科学的根拠となる数値”をはじき出し、厚生労働省に知らせます。通常は、数カ月かけて評価します。

厚生労働省はこの数値を参考にして、いろいろな要因を総合的に判断し、最終的に残留基準を設定するのです。

つまり、食品安全委員会は、監督官庁が設定する基準値の科学的根拠を提供している「縁の下の力持ち」的な組織なのです。

ですから、皆さんがお店で買い物をするとき、商品の外箱などに厚生労働省や消費者庁などの名前を目にされることがあっても、食品安全委員会の名前を見る機会はありません。だから、なじみが薄いのです。

食品安全委員会の構成

親委員会(通称)

7名

14の専門調査会(約200名)

化学物質系グループ: 農薬、添加物 など

生物系グループ: 微生物、プリオン など

新食品グループ: 遺伝子組換え など

企画

緊急時対応

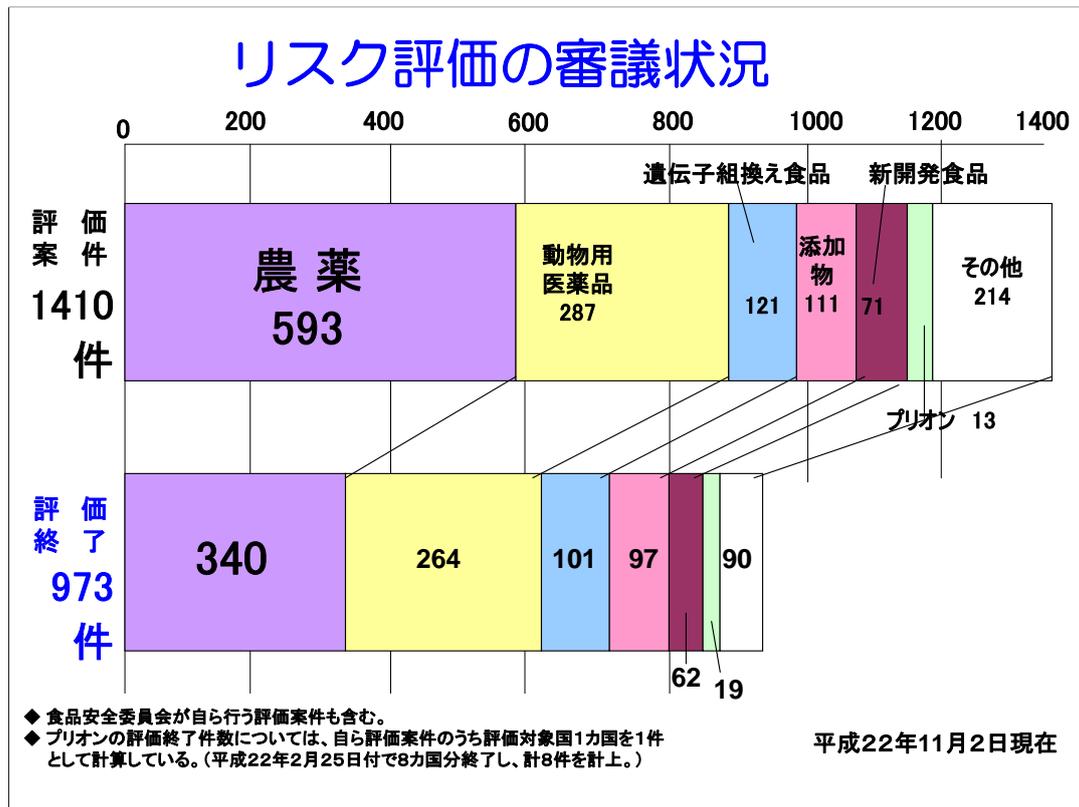
リスクコミュニケーション

平成22年4月現在

食品安全委員会の役割がお分かりいただけたかと思います。それでは、この委員会の組織構成はどうなっているのでしょうか。

私たちが通称「親委員会」と言っている、7名の委員からなる会議体があります。そして、評価するものによって14の専門調査会が設置されています。今日のテーマである農薬も、「農薬専門調査会」というところで評価されています。

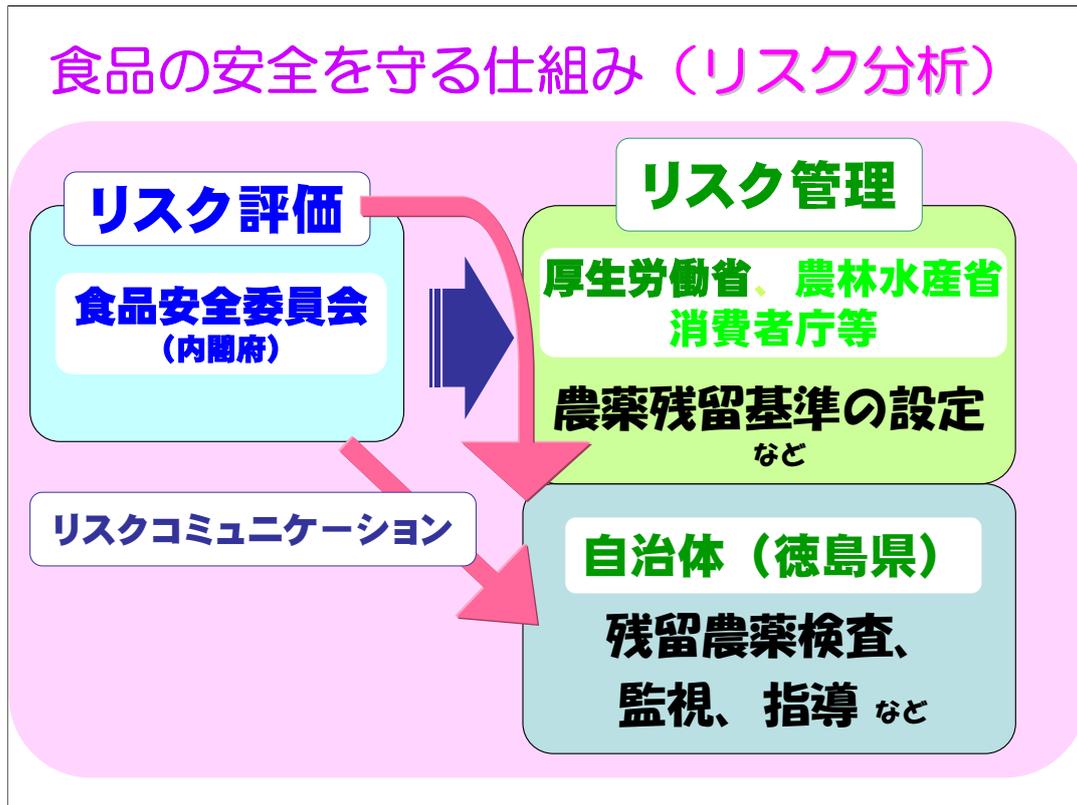
親委員会の委員も、専門調査会の専門委員も、そのほとんどが、研究機関や大学からの日本を代表する研究者です。リスクコミュニケーション専門調査会などには、一般からの公募委員も含まれています。



そのような食品安全委員会は、これまでどれくらいの数のリスク評価をしてきたのでしょうか。

先ほどご紹介したように、厚生労働省や農林水産省あるいは消費者庁といったリスク管理機関からの評価依頼がほとんどを占めていますが、今まで**1410**件の依頼がきています。

そのうち、11月2日時点で**973**件が終了しています。ご覧のとおり、農薬の件数が全体の**3~4割**を占めています。



それでは、リスク分析の仕組みの中で、食品安全委員会と徳島県はどこで絡んでくるのでしょうか。

先ほどご説明したように、食品安全委員会のリスク評価の仕事は、厚労省や農水省や消費者庁といった国の機関とのやりとりしかありません。

一方、徳島県は、リスク分析の枠組みの中では、リスク管理を担当しています。たとえば、厚生労働省が設定した農薬残留基準を超えた農産物がお店で売られていないかなどを監視したりしています。

そういう位置づけの中で食品安全委員会と徳島県は、2つのルートでつながっています。1つは、リスク管理という仕事を通じたルートで、国のリスク管理機関を介して間接的につながっています。もう1つは、食品安全委員会と徳島県のそれぞれが取り組んでいるリスクコミュニケーション活動というルートです。

きょうのサイエンスカフェも、まさにこのリスクコミュニケーションそのものです。



それでは、田中さん、
どうぞ！

食品に農薬は
どれくらい残留しているの？

そういうことで、そろそろ、田中さんにバトンタッチしたいと思います。
田中さん、よろしくお願いします。